

第2学年 美術科学習指導案

日時	平成25年11月12日(火)	4校時
学級	奥州市立江刺第一中学校	
	2年5組 男子17名 女子17名	合計34名
場所	3階 美術室	
授業者	教諭 嵯峨 靖勝	

1 単元名 鑑賞「二つの伊藤若冲作品を比べて鑑賞し、題名を考えよう」

2 単元について

(1) 教材観

学習指導要領の教科の目標として「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、美術の創造活動の喜びを味わい美術を愛好する心情を育てるとともに、感性を豊かにし、美術の基礎能力を伸ばし、美術文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。」とある。

領域の区分は「A表現」と「B鑑賞」になっている。

「B鑑賞」では知識なども活用しながら自分の見方や感じ方を大切にして、身の回りの造形や作品のよさや美しさなどを豊かにとらえ、生活の中の美術の働きや文化についての理解を深め、幅広く味わうことのできる鑑賞の能力を育成することを目指している。

これまでこの学年では「鑑賞」の領域の各学年での年間計画的な取組や実践研究は「表現」に比べて少なく、生徒の制作作品の鑑賞が中心だった。また、日本の優れた美術作品を取り上げることも少なかった。

そこで本時では鑑賞学習を行い、生徒に鑑賞の能力を身に付けさせ、他者との交流によって、鑑賞の広がりや驚きを体験させることを目指す。さらに、伊藤若冲を扱うことで日本美術特有の絵画表現を学ぶ機会としたい。

今回取り上げる作者の伊藤若冲は、江戸時代中期の画家であり、多くの作品の中でも『動植綵絵』は日本美術を代表するものとして、近年特に注目を浴びている。また、1年生の教科書に「美術との出会い」と題して掲載されている作家でもある。その伊藤若冲の『動植綵絵』の中には写実的な表現方法で描かれたものが多く、描かれている対象も生徒にとって平易で身近なものが多数含まれている。

生徒達は興味、関心をもって鑑賞活動に取り組めると考える。

(2) 生徒観

これまでの授業では鑑賞活動として、お互いの制作途中の作品と完成した作品を鑑賞する場面を設けている。生徒達はお互いの作品を見て、作品のよさや工夫について気づいている様子がみられ、興味をもって鑑賞している生徒がいる。その反面、積極的に他生徒の作品を見て回れない生徒もいる。その原因としては、自分の発想、見方や感じ方に自信が持てないことや納得のいく形で言語化できないこと、また生徒同士の関係性がまだ十分に形作られていないことが考えられる。

今年度の学校行事で、県立美術館の伊藤若冲展「若冲が来てくれました」を鑑賞する機会があった。そのため生徒達の関心がより高まっており、また、皆で同じ体験をしてきたことで、より積極的に自分の意見を出しやすいのではないかと考えられる。

今回の授業では、鑑賞学習の一連の行為として、主体的に「対象(作品)と出会い」「見る」「感じる」「知る」「思いを巡らす」「考える」などを体験させ、人と関わり合う場面を通して、個々の発想力と表現力を高める機会とする。

(3) 指導観

今回の題材を始めとして鑑賞の学習過程を次のように設定した。

①感覚的・直感的な鑑賞の段階(興味や関心を抱く段階)

②初期の共有段階(各自の印象や感想を発表し合い、作品全体の感じを捉える段階)

③分析的な鑑賞の段階(じっくり見て気がついたことをメモしたり、発言したりする。描かれているものは何か、モチーフ、テーマを確かめながら見る、どのように描かれているかを見る、同一テーマなどを取り上げた他の作品を見る段階)

④調査的な鑑賞の段階

(資料から「いつ、どこで、誰が、何のために、作者の生きた時代、社会背景、同時代の他の作品」)

⑤思いを深め味わう段階(想像や推理を働かせ、調べたり話し合ったことをもとに、作者のねらいや描かれている内容などについて)

⑥まとめの鑑賞の段階(深く味わいながら鑑賞し、鑑賞カードなどに作品や作者に対する感想や自分なりの評価などをまとめる)

本時では初めに二幅の作品「南天雄鶏図」と「群鶏図」を提示し、その印象を発言させることから始める。次に作品を生徒に鑑賞者としての自分の見方や感じ方を大切にさせながら、自分なりの鑑賞の視点で作品への思いや感じたことを発表させる。その発表の中で新たな視点や他者の思考や価値観に触れさせる。初めの印象から、学習が進むにつれて徐々に作品との距離が縮まり、より具体的に視点を広げ積極的な鑑賞を進める中で、その能力の広がりや深まりをねらいたい。

3 単元の目標及び指導計画

(1) 単元の目標

・作品の雰囲気や印象を味わい確かめながら、鑑賞の視点をもって、表現されているものや表現のよさに気づくことができる

(2) 指導計画（指導内容、教科規準）

	指導内容	時数	観点別評価規準	
			関心・意欲・態度	鑑賞の能力
1	伊藤若冲「動植綵絵」の世界にふれ、作者の思いや表現の工夫を感じ取ろう	1 【本時】	関① 作品鑑賞を通して、作品の美しさや面白さを感じ取ろうとしている。	鑑① 鑑賞の視点をもって、二幅の動植綵絵の比較を鑑賞することができる。 鑑② 自分の気づきや感想と他者との違いについて理解し、自分の思いを深めることができる。

4 本時の指導

(1) 目標

- ①作品鑑賞を通して、作品の美しさや面白さを感じ取ろうとしている。（関心意欲態度①）
- ②鑑賞の視点を持って、二つの作品を比較鑑賞することができる。（鑑賞の能力①）
- ③自分の気づきや感想と、他者との違いについて理解し、自分の思いを深めることができる。（鑑賞の能力②）

(2) 評価規準

評価の観点	観点別評価規準	
	概ね満足できる	支援を要する生徒への手だて
関心意欲態度	関① 「動植綵絵」を見て、作品の美しさや面白さを感じ取り、印象や感想を発表したり、記述したりしている。	学習シート「鑑賞の視点」にそった発表と、他者のそれとの違いを具体的に指摘し、その違いについて気づかせるように支援する。
鑑賞の能力	鑑① 比較鑑賞により、その相違についてまとめている。 鑑② 自分と他者との気づきや感想の違いを理解し、意見交換をして自分の思いを深めることができる。	

(3) 本時の指導構想

①「ねらいに迫る指導過程」について

本時は、評価の観点「美術の関心・意欲・態度」の評価規準

「鑑賞活動を通して、作品の美しさや面白さを感じ取ろうとしている。」と

鑑賞の観点「鑑賞の能力」の評価規準

「二幅の動植綵絵の似ているところと違っているところに注目して鑑賞をすることができる。」

「鑑賞の視点をもって二幅の動植綵絵を比較鑑賞することができる。」

「自分の気づきや感想と他者のそれとの違いについて理解し、自分の思いを深めることができる。」
をねらったものである。これらのねらいに迫るために、指導過程を次のように設定した。

i 【説明する】

初めに、二つの作品コピーを提示し、初発の感想を個々に発表させる。この段階では、先入観をもたず素朴な驚きや感想を主に発表させたい。次に、発表されたことを起点にしながら、鑑賞の視点について学級全体で交流しながら抽出していく。予想される視点には次のような項目があげられる。

- ・鳥の様子
- ・草花の様子
- ・描かれている場所
- ・鳥の描き方(画面構成の仕方)
- ・鳥の目つきや視線の行方
- ・絵の雰囲気 等

このような視点をもって、再度各自で鑑賞し自分の考えや気づきについて確かめる。

ii 【理解の確認】

小グループでの交流の場面を設けて、自分なりに鑑賞したことと、他の人の発表内容とを比較し、その違いについて気づかせる。ここでは、他との関わり合う中で、不十分な視点を表出させ、自分だけの視点からさらに客観性を高めるために他者からの視点をもたせ、思いこみや誤解の修正へとつなげる活動とする。

iii 【理解深化】

提示された二つの作品について、再び全体で抽出した鑑賞の視点にそって鑑賞を進め、新しい発見や気づきをまとめる。同時に、作品のテーマに迫る「何がどのように描かれているか」について、自分の考えや思いを含ませながら「見方や考え方の変容」をめざしたい。さらにここまでの鑑賞活動を元に作品の題名を考えさせる。その後、若冲がつけた題名を紹介して、生徒の「見方や考え方」と重なる点を取り上げていきたい。

iv 【自己評価活動】

本時の学習過程全体を振り返り、生徒が自分の中に生じた「見方や考え方の変容」を客観的にとらえ、学習のまとめをする段階とする。本時では、学習シートの最終項目に設定した「鑑賞を終えて」に記述させ発表させる。この中には、本時の学習から更に発展的に知りたいとことや深めたいと思ったこと等についても発言や記述によって求めていきたい。授業のまとめとして、単純に「面白かった」「楽しかった」ではなく、生徒自身が今日の授業を振り返り、その学習過程や成果に生徒自身で価値づけを行い、更に鑑賞力を高めていくような生徒を育てていきたいと考える。

②「言語活動」について

本単元で指導したい「言語活動」は次のようにとらえた

【理解の確認】～【理解深化】では、前段階の二幅の作品への漠然とした直観的な印象の発言から、共有の鑑賞の視点をもって更に鑑賞を深める段階で、他生徒の気づきや思いの相違について確かめる。この過程で大切にしたいことは、直観的な鑑賞による記述や発表から分析的な鑑賞へ移行できるように、生徒1人1人が個別に根拠となることを含ませた記述をさせることである。見る対象(作品など)から何かを感じ取り、感じ取った何かを言葉で表現する。生徒は、感じたことや考えたことを言葉で表現することにより、自分の感覚や感情をしっかりと認知し、対象への思いを深めることができるかと考える。

(4) 展開

段階	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価の観点・規準・方法
導入 10分	1 本物の作品を鑑賞したことを思い出す。	・若冲の展覧会で本物を鑑賞したこと、その時のことを思い出させる。	【関】 作品をみて、作品の美しさや面白さを感じ取り、印象や感想を發表することができる。
	2 二つの作品を鑑賞し、初めの印象を發表する。 【個人で】	・動植絵を紹介する。 ・学習シートを配布する。 ・黒板に大きい図を掲示する。 ・先入観なしに作品を鑑賞させ、気づいたことや感じたことを發表させる。 ・二幅とも一度に提示せずに、一幅ずつ提示して、發表させる。	
	3 課題を把握する。	・作者がどんな題名をつけたのかを考えさせ、興味を持たせる。	
	<学習課題> 二つの伊藤若冲作品を比べて鑑賞し、題名を考えよう		
	4 鑑賞の手順を知る。	・次の手順を示す。 ①自分で味わう ②グループで味わう ③全体で味わう ④題名を考える ⑤まとめる	
5 鑑賞のポイントを知る。	・鑑賞するときに大切にしたい姿勢を示す ①自分の感じたことに自信を持って發表する ②他の人の意見をよく聞き、認める		
展開 30分	6 二つの動植絵を比較鑑賞し、①似ているところ(共通要素)②違うところ(異なる要素)に注目し、發表する。 【個人、小グループで】 【ワークシート②】	・小グループに二種類の作品資料を配付する ・比較鑑賞により、鑑賞の視点(似ているところや違うところ)を發表から抽出し、項目としてまとめる。	【鑑】 二つの作品の似ているところと違うところに注目して鑑賞をすることができる。 (發表の姿勢や様子)
	〔予想される視点〕 基本を色と形とし、他に鳥の様子、草花の様子、描かれている場所、鳥の描き方、画面構成、鳥の視線や目つき、絵の雰囲気		
	7 二つの動植絵を鑑賞の視点にそって比較鑑賞し、感じたこと、気づいたことを發表する。【小グループ】	・「感じ取る」「読み取る」について、説明する。 ・視点を一つずつ取り上げて進める。 ・取り上げた視点に沿って、生徒達が發表できるように支援をする。 ・發表を聞いて、自分なりにどのように考えるかを確かめさせる。 ・他者の發表から気づいたり、自ら考えてなかったことを確認させ、鑑賞の視点の広がりをもたせる。	【鑑】 鑑賞の視点をもって、二つの作品の比較鑑賞をすることができる。(發表の姿勢や様子) 【鑑】 自分の気づきや感想と他者との違いについて理解し、自分の思いを深めることができる。 (学習シートへの記述)
	8 作品の題名を考える。 【個人・小グループ】 【ワークシート③】	・7の活動を通して気づいた点、感想を元に発想させる。 ・発想した題名の理由を考えさせる。	
9 2幅の題名を伝え説明する。	・若冲が表現したかったこと、観る人を感じてほしかったことについて考えさせる。 ・生徒達が感じ取ったこと、読み取ったことを取り上げるように努める		
終末 10分	10 ワークシート「鑑賞を終えて」を記入し、本時を振り返る 11 感想發表	感想の例 ・伊藤若冲の絵を鑑賞して、リアルで写真のように細部まで描がれていることに感動した。 ・初めに二つの絵は全然違うと思ったが、鑑賞の視点を持って見ると同じような表現の工夫があることが分かった。 ・友達の發表を聞いて、自分との見方や感じ方との違いに気がついたので、これからの見方の参考にして、より深い鑑賞ができるようにしたい。	

